

れています。当時の人たちにとっては重症の皮膚病とは違って律法に関わる特別な病気として恐れられていました。

わたしは仙台の北にあるハンセン病の国立療養所に四回ほど訪ねたことがあります。個人的に、療養所にある礼拝に二回出席しました。そして教区の訪問でも伺いました。良い人たちでした。しかし、わたしにはそこに背負っておられるもののほんの一部に心当たりがありました。

わたしの病気の中でも皮膚病はつらいものでした。かゆい発疹が出て水泡になり、それが破れるとただれて、汁が出てそれを覆っている包帯が張り付いて、はがすのに痛みました。皮膚の弱いところ、日光にあたるところに広がっていきます。当時は病名も付かず、治療の効果を見たことはありませんでした。ただ、何ヶ月かするとかさぶたがはがれて劇的に回復しました。

思い起こされるのは、比較的大きな総合病院で治療を受けていましたが、ある日待合室にいつの間にか人がいなくなりました。わたしは毎日のように行っていましたから、受付や、下足番のおばさんとは仲良くなっていました。しかし、その時は異様な時でした。母は泣いていたのだと思います。後で母からここでいう「重い皮膚病」に思われたのだと言われました。それに前後して、近くの公園でひとりでブランコに乗り、落ち葉を集めてそこに飛び降りるという遊びをしていました。すると一群の同じような学年の子どもたちが何かを叫んで、次々と石を投げつけてきました。

た。そのうちの一つがちょうど私の額の真ん中あたり、痛みはほとんど感じませんでした。が、額が割れて出血しました。わたしも石を拾って向かって行きましたが、むしろ相手の方が驚いて蜘蛛の子を散らすように逃げ去りました。一人で帰るのを近所の人が見つけ大騒ぎで、病院に行きました。少し縫った程度で大したことはありませんでしたが、しばらくは傷があり、学生時代は触ると分かります。後でその子どもたちは「ミイラ、ミイラ」と叫んでいたことに気づきました。「ミイラ男」のような漫画がはやった時代です。幸い、成長につれて、皮膚病は次第に収まってきました。それによつて受け入れる他にはないものがあることを知らされました。

しかし、子どもながらにそういうところにイエス様が出てくるのではないかと思っていました。一〇人の重い皮膚病のものたちの一人が帰ってきたのは何かの鍵のように思えていました。ヨブの話も、陶器の破片でかきわしたところに共感していました。

病気は折り紙や読書だけでなく、祈る思いをもたらしします。私のことですから、熱心に祈るというのではありません。不安の中で耐えきれずに、訴えるようなものです。明日の朝、のどが痛くなく起きられるように祈ったことを思い出します。

二月講壇一覧

第一主日(二月二日) 公同礼拝

「心は燃えても」 高橋和人牧師

詩編 八八・一四〇一九

マタイ 二六・三〇〇四六

第二主日(二月九日) 公同礼拝

「剣を捨てて」 高橋和人牧師

創世記 九・一〜七

マタイ 二六・四七〜五六

第三主日(二月一六日) 特別伝道礼拝

「人は何ものなのだ」 高橋和人牧師

詩編 八・一〜一〇

ルカ 一七・一一〜一九

第四主日(二月二三日) 公同礼拝

「主イエスによつて」 姜 涇米牧師

詩編 一六・七〜一

使徒 一三・一三〜四一

三月講壇一覧

第一主日(三月二日) 公同礼拝

「神の子、人の子」 高橋和人牧師

イザヤ 五二・一三〜一五

マタイ 二六・五七〜七五

第二主日(三月九日) 公同礼拝

「神の沈黙、人の叫び」 高橋和人牧師

イザヤ 五三・一〜一二

マタイ 二七・一〜三二